

研究所ニュース

ね ざ す

第93号 2023年1月発行

発行：一般財団法人 神奈川県高等学校教育会館 教育研究所

〒220-8566 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045(231)2546 F A X：045(241)2700 e-mail：GAE02106@nifty.ne.jp



「人は変わる。社会は変えられる。」

～少年院、再出発、NPOセカンドチャンス!、映画「記憶」の制作～

中村すえこ

■はじめに

私は2009年に立ちあがった少年院出院者の自助グループNPO団体『セカンドチャンス!』に所属し活動しています。

セカンドチャンス!は年齢や職業に関係なく、少年院出院後に社会に出て頑張っている人たちの集いです。主な活動は少年院での講話とそれから皆で励まし合い、嬉しいことや悩みなどを分かち合い、より良く生きるための居場所づくりです。「どんな研究者より、君たちの少年院経験が必要だよ」これは、設立者の大学教授が私たちに言った言葉です。この言葉を聞いたときに、これからは過去も生かしていきける生き方をしたい。そう思うようになりました。

■非行の始まり

現在、私は私立高校の社会科教員をしています。教員をしていると言うとほとんどの人が驚きます。レディース総長として知られているイメージが強く、非行歴、少年院経験、中卒、それらのキーワードから教員は想像つかないからだと思います。実は自分でも驚いています。教員免許は40歳の時に大学に進学し取得しました。

私は4姉妹の末っ子に生まれ、6人家族で育ちました。父は大工と聞いていましたがほとんど働かず、酒を飲んでいる姿しか記憶にありません。機嫌が悪くなると母に暴力をふるう父が嫌いでした。家計は母が食堂で働いていた収入だけでしたので貧しかったと思います。思います、と言ったのは小さいころは自分の家が貧しいってことは知らなかったからです。小学生になり、友達の家に遊びに行くようになると、お父さんは昼間会社に行っているということ、トイレは水が流れるということを知り、自分の家は他所の家と違うということに気づきました。

経済的な理由から、母は夜の仕事をすることになり、そのころから私はひとりの夜を過ごすことが多くなりました。ひとりの夜は、最初のうちは楽しかったです。自由がありテレビもお風呂もご飯も好きなきにできるからです。でも、風が強い日や雨がたくさん降っている日は、不安と心配でとても心細かった。ひとりの時間が長くなるにつれ、自由はさみしいってことに気づきました。ひとりご飯はテレビ味、ひとりの夜は深くて長いからです。

小学校高学年になると、もう諦めというか、言っても何も変わらない状況を理解してしまし

た。「うちは貧乏だからお母さんが働くしかない」。

中学入学後は同じような環境の友達ができ、ひとりの夜を過ごすことがなくなった。深夜徘徊から始まった私の非行はどんどんエスカレートしていきました。万引き、深夜徘徊、無免許運転…と最初はドキドキ、ハラハラしながらやっていましたが回数を重ねる度に、罪悪感もなくなっていきました。髪を染め、長いスカートを引きずりながら学校は給食だけ食べに行く。学校をフケてみんなと深夜まで遊ぶの繰り返し、金髪になった私を見ても母は何も言いませんでした。

■真面目に総長していました

中学を卒業し、同級生が新しい生活をスタートさせている中、私のレディース総長としての生活が始まりました。総長になってからはチームを拡大するため、抗争を繰り返し、深夜はバイクで暴走する毎日です。そのころは親や家族に期待するよりも、いつも近くにいるくれる友達を大事にするようになっていました。

もう、長い夜をひとりで過ごすことはなくなりました。

次々と抗争を繰り返し、連合をつくりそのトップに立ちました。この居場所を失いたくない、ただそれだけでした。もう何も見えなかったのです。そして、忘れもしない16歳の夏、私は傷害事件で逮捕されました。

■母の涙

「チッチッチ」。決して広いと言えないこの部屋で、聞こえてくるのは秒針と私の鼓動だけでした。長い沈黙のあと、目の前に座っている裁判官が口を開き、「これからの君に期待しているよ」といいました。私は「やった！帰れるんだ！」と喜んだ…矢先、裁判官は続けて「君を中等少年院送致とする」と告げました。その瞬間、私は自分が泣いていることに気が付きました。後ろからすすり泣く声が聞こえ、振り返ると母が涙を流し、私を見ていました。全く反省なんかしていなかったけど、母の涙をみたとき、胸が苦しくなりました。

■あれから30年

少年院に収容され、出院してから居場所がなかったこと、そして薬物に手を出し、再び犯罪に手を染めてしまったこと、いろいろありましたが、私が変わるきっかけとなったのは再犯で逮捕されたときでした。「変わりたい」そう思えるようになったのは、母に愛されていることに気づけたことと、命について諭されたことが大きかったと思います。本当に本当にたくさんの方がいました。それでも今こうして生きているのは、あの時に、「変わりたい」と思えたからです。

私は、4人の子どもの母になりましたが、子どもたちの存在は、私の心のブレーキになったと言えます。10代のときは困ったとき、辛いときは犯罪という逃げ道しか知らなかったけど、今は違います。母になり、子どもたちを守ることが第一優先になりました。そして子どもたちの成長が私の希望となり、大きく成長させてもらえたと思っています。

それともうひとつ、セカンドチャンス！設立と活動は自分の人生の起点になりました。出会った仲間たちから、学びという新しい道を教えてもらいました。新たな出会いは新しい発見とつながっていきます。私の人生、人との出会いで救われたと思います。

これから出会う多くの仲間に「ひとりじゃない」、そう伝えていきたいなって思います。

■そう生きるしかなかった少女たち

セカンドチャンス！の活動には、少年院講話があります。私は、全国に9施設ある女子少年院を全て訪問し、多くの少女と出会いました。

東北地方にある少年院に訪問したときの出来事で印象に残っていることがあります。それはある少女から「幸せになってもいいんですか？」と質問を受けたことです。そして驚いたことに一年後同じ施設に訪問した際、違う少女から全く同じ質問がでたのです。少女はなぜその質問をしたのだろう。その問いの先を知りたくて、私の少年院訪問が始まりました。そして出会ったほとんどの子が虐待・ネグレクト・貧困・放任でなく放置に近い環境であるということを知

りました。

少女たちを取り巻く環境は想像を超えるものです。養父を刺してしまった子はずっと性虐待を受けていました。真犯で補導された子は、住んでいる家の電気もガスも止められていました。働かない親の代わりに援交で稼いでいた子、働いたお金を親に搾取されている子、現状を知らなければ知るほど、そう生きるしかなかったんじゃないかな、と思うようになりました。

少女たちは「加害者になる前に被害者であった」ということです。少年院に収容されるということはなんらかの犯罪に手を染めてしまったということであり、この事実は変わることはないことです。しかし、犯罪の背景には、自分だけでは解決することのできない問題があったのです。衝撃でした。そして、問題はまだ続いていきます。少女たちは少年院の中で、初めて信じられる大人に出会います。少年院生活で、初めて安心して寝ることができ、信頼できる大人と、規則正しい生活の中で矯正教育を受け、自分自身を見つめなおすことができるようになります。そして出院後の社会生活に希望を持ち、新しいスタートを切りますが、そこで問題になるのが、社会という大きな壁です。社会に戻ると、これまで寄り添ってくれた法務教官はいません。安心して寝る場所も信頼できる大人もいません。社会は少年の立ち直りに無関心であり、自己責任だと判断します。

■社会を変えたい

2015年、全国に9カ所あるすべての女子少年院に訪問することができました。そのときくらいからずっと考えていたことがあります。それは、少年院で出会った少女たちが、被害者にも加害者にもなることのない社会には何が必要なのかということです。

同時期の話になりますが、私は高等学校卒業程度認定試験合格後に大学に進学したときでもありました。とにかく勉強がしたい、知らないことを知りたい気持ちでいっぱいでした。授業は必修科目と自由選択があり、勉強が嫌いにならないように、まず自分の好きな科目を受講していたときのことで。私が興味あるのは社会

学だということを知りました。授業の合間には社会学の先生といろいろ話すことが楽しい時間でした。

あるときその先生が「常識を疑う」という言葉を私に教えてくださいました。その言葉は、私の頭の中の点と点をつなげてくれました。「そうか、多くの人が同じ意見だとしても、それが常識とは限らないんだ」。大事なのは、社会で起きていることを自分基準の普通とか常識にあてはめずに、事実を見るということ。知るということだと思いました。だとしたら、事実を知る機会があれば変えられるのではないかと考えました。なぜなら、知ることで意識を変えることができるからです。

その方法として、映画製作にいきました。映画はドキュメンタリーにし、少年院にいる少女たちがどうしてここにきたのか、少女たちの声を聴こう、そして犯罪の背景にあるものを知ったら何が必要なのか考えることはできるはずだと。そして、2019年、7月ドキュメンタリー映画「記憶」は完成しました。



■社会は変われます(記憶アンケート調査より)

映画視聴の感想をご紹介します。『その罪を犯してしまった人だけのせいではないのだと思った。特に少年犯罪では、育った環境等影響してくるのだと。加害者が被害者であったという事実を知らず、悪い子という失礼なイメージしか持っていなかった。』『誰か一人は支える人が必要。改めて寄り添ってなんだろうと思った。』『子どもが社会を信頼できるようになるには、親や家族以外の大人が大事だし、その家族が社会から助けられ、幸せになることが大事なのに、社会が家族に求めすぎている。』『実際のドキュメンタリーで生の声を聞いて、現場で学び、背景を知る大切さを深く学ぶことができた。福祉の道に進まないとしても、人と

接するにあたって相手を知るところを正視して、生活したい。』

『言葉では言いあらわす事がむずかしいです。すごく心にぐさーっときました。いったい私に何が出来るだろう。子どもたちが悪いことに走るのは私たち大人の責任でもあるんだと強く感じました。私に何が出来るだろうか…。まずは困っている人がいたら知らない人でも他人でも知人でもまずはその人に寄り添ってみる！！事をしてみようと思います。小さな所から…。それがきっと大きなことにつながると信じてやってみます。』

『社会の中にあるステレオタイプ化された非行少年のイメージを変化させていくことがまだまだ必要で、本作品のようにしっかりと「現実」と出会える、向き合える機会が大切だと改めて思いました。地域の中で丁寧に積み重ねていき

たいと思います。』

■最後に

今、教師として生徒に関わるようになりましたが、子どもたちが抱える闇は非行でもそうでない子でも変わらないような気がします。近年、不良ではない非行、非行ではない犯罪が増えていると私は思っています。これは犯罪をしてしまう子が特別なのではなく、ちょっとしたボタンの掛け違いで誰にでもあり得ることだということです。

誰にも言えない悩みや不安、理解してもらいたい気持ちや、諦めてしまった心、自分は必要な人間なのかなと思うことや、自分自身を見失うことだってある。そんなとき、大人はどうあるべきでしょうか。

「記憶」上映会

開催日：3月19日（日）
申し込み不要 入場無料

13時30分 受付開始

14時00分 上映開始（110分）

※上映後に、中村すえこさんよりご挨拶

主催：一財）神奈川県高等学校教育会館 教育研究所

共催：一社）記憶製作基金事務局

場所：神奈川県高等学校教育会館 2Fホール

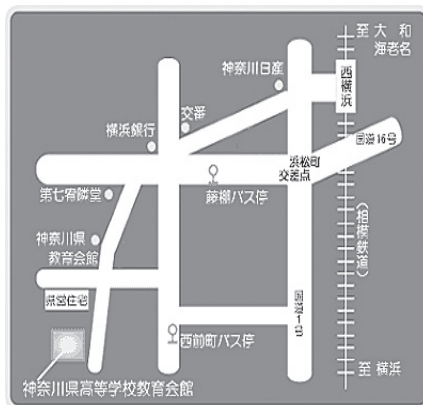
【お問い合わせ】

一財）神奈川県高等学校教育会館教育研究所

〒220-8566 横浜市西区藤棚町2-197 TEL：045-231-2546

e-mail：GAE 02106 @nifty.ne.jp

半角でご入力ください



高等学校教育会館

執筆者プロフィール

2008年、自らの半生を綴った、「紫の青春恋と喧嘩と特攻服」で作家デビュー。2011年、「ハードライフ～紫の青春恋と喧嘩と特攻服～」として映画化され、全国上映。NPOセカンドチャンス！創設メンバーとして講演活動などを続ける様子がメディアで特集となる。2019年、監修・監督のドキュメント教育映画「記憶」が完成。新聞やテレビで特集が組まれ、全国で上映会実施中。2020年「女子少年院の少女たち」（さくら舎刊）を上梓。2021年、「記憶2」製作を開始。